

私が期待する写真 道展審査員から

第一部 自由

■ 森 哲

デジタルフォトでの応募について

既刊の会報を見ますと、審査委員長を始め審査委員の方々が掲載した「期待する作品」や応募でのアドバイスの的確に書かれており、それらをもう一度読み返して頂きたい

と思います。また、道写協のホームページでも読むことができます。私はデジタルフォトについて触れてみたいと思います。近年デジタル写真での応募が毎回増加しており、今後その傾向は顕著と考えられます。応募にあたって注意すべき点は、デジタルカメラで撮影した写真は各部で応募できますが、第二部・三部では「加筆や削除など二次的画像の加工は不可」となります。合成や画面内での移動、不要なものを消す。

大きな色調の修正や加工はできません。可能なのはホワイトバランスや微妙な色調調整、シャープネスとトリミング程度です。二部・三部の審査で合成が問題になることが多

くあります。合成や消す技術が向上して見極めが付きません。この点は、応募される皆様の意識やモラルに頼る外ないと思います。

第一部については、それらの制約はありませんが合成などで使われる写真は、全て応募者自身が撮影した写真に限られます。また、デジタル画像編集は応募者自身が行う事が基本であり、作品に対する創造や個性、無限の表現に挑戦して頂きたい。写真道展でもテクニックフォトの「デジタルフォトアート」が、創造力や表現力また技術的にも益々向上して、第一部の一角をになうよう期待します。

第二部 観光・産業

■ 辻川 和夫

五感で・カシャット・魂の叫び

写真はテレビなどのメディアに比べると、動き出すこともないし、音も出ない。旧いばかりか原始的ときえ言われかねない。でも、だからこそ私たちは想像力を働かせすべての感覚に訴え、その力なるものをフルに使いこなして表現につないでいかなければ、その真価を發揮することができないであろう。そこで想像力とは自分自身を重ね合わせ、時にはその背後、周囲にあるものまで読み解き感じとらせる力だと思ふ。

写真は光の芸術である。

太陽の角度だけでなく、季節、時間、天候、いつた決定的要因をさまざまに組み合わせるといふことはじめから度外視していた光などを感じ、未知の光が似合う被写体というものの存在を発見するはず。「違う光」でシャッターしてみることが自分のおもいにつながると思ふ。

他人から与えられた感動でなく、自分で見つけた感動を作品の表現につないで欲しい。感動するためには皆さんの努力を要する。知識として知ることは重要だが「体験」にはならない。見る、聞く、触る、嗅ぐ、想像することにより、さまざまな感覚やイメージーションを働かせると、そこに感動が生れる。特に観光産業については事前学習で熟知し、主役は何か視点をどこにおくかをはつきりとして「おもい」のこもった魂の満ち溢れた生き生きとした作品が生れてくることに期待したい。

第三部 ネイチャーフォト

■ 山本 康雄

ダイナミックな切り取り

ある人は雲は美女が纏うベールの様だと言われました。自然を見つめる豊かな感受性と重要性を教えられている様な気がします。

ドラマチックに移り変る自然現象の不思議さと、大自然が織りなす移ろいに感動しながら創造の世界と感情表現の追及に心がけ、素直に心惹かれた所にレンズを向け切り取って行く事により、今求められている新鮮な写真、個性的な表現に繋がって行くものと思われまふ。

写真はコピーではありません。印象に残る作品を作るには多少の強調は認められます。撮った時の想いをいかに伝えるかが重要です。光彩、陰影、動物、植物等の生命力をいかに表現するか、枯れても朽ち果ててもなお人の心を引き付ける被写体も見逃すことが出来ません。マクロレンズ、接写リング等を使用しても宇宙感のある面白い作品が出来るのではないのでしょうか。インパクト、スケール感、ダイナミックな切り取りコンテストにはとても大切な要素です。意識的に手を加えた写真からは感動は得られません。素直な眼で撮った作品がストレートに響いてくるものです。ネイチャーの世界は限り無く広く、海の底から宇宙の果てまで含まれ、刻々と移り行く気象の変化を的確に捉えて行くことにより、二期一会の世界に出逢えるのではないのでしょうか。その中で生きる動物達を擬人化して捉え生命、愛情、親子、夫婦の絆等の表現も感動を与えることでしよう。